

## 小児新型インフルエンザ重症例の動向

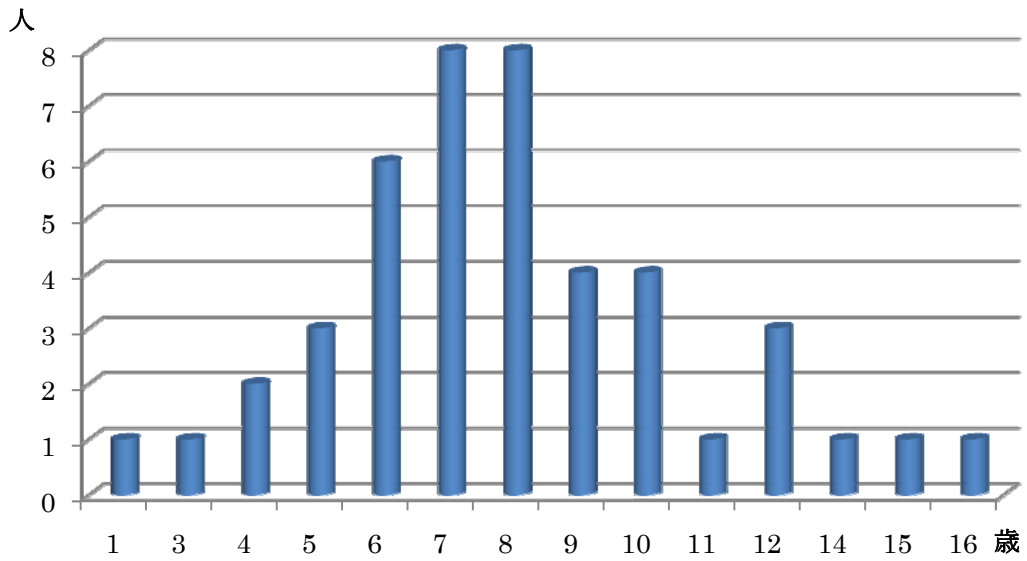
### (10月27日新型インフルエンザ対策室第4報)

10月27日現在における日本小児科学会への届出症例、とくに脳症の解析結果をお知らせします。

- ・脳症の発症年齢は中央値8歳と依然として年長児の発症が多い傾向にあります。
- ・新型インフルエンザによる脳症の大きな特徴として、初発症状としてのけいれんの少なさ挙げられます。解析可能であった35例中13例(37%)が初発症状としてけいれんがあり、熱せん妄・異常行動は同12例(34%)、意識障害同10例(29%)です。異常行動から脳症に至る例、または意識障害から脳症に至る例が多いのが特徴的です。(おそらく、多くの先生方からの「新型インフルエンザはけいれんが少ない」との感想に一致していると思われます。)
- ・死亡は5例(HSES2例、ANE1例、詳細不明2例)。予後については厚生労働省報告例の92例を母数と考えると約5%、小児科学会への届け出(川名班10例を含む)とすると約9%であり、この数年の致命率約8%とほぼ同じで維持しています。
- ・肺炎の合併は4例に認められました。これは従来の季節性インフルエンザに比べ、新型インフルエンザでは重症肺炎が多いことの反映と思われる。また、こうした症例では呼吸困難を初発症状とする報告もありました。
- ・治療についてはほとんどの症例がステロイドパルスまたはmPSL中等量の投与がなされ、約40%の症例で大量ガンマグロブリン療法が行われていました。レスピレーター管理に至った例は9例です。
- ・今後の課題

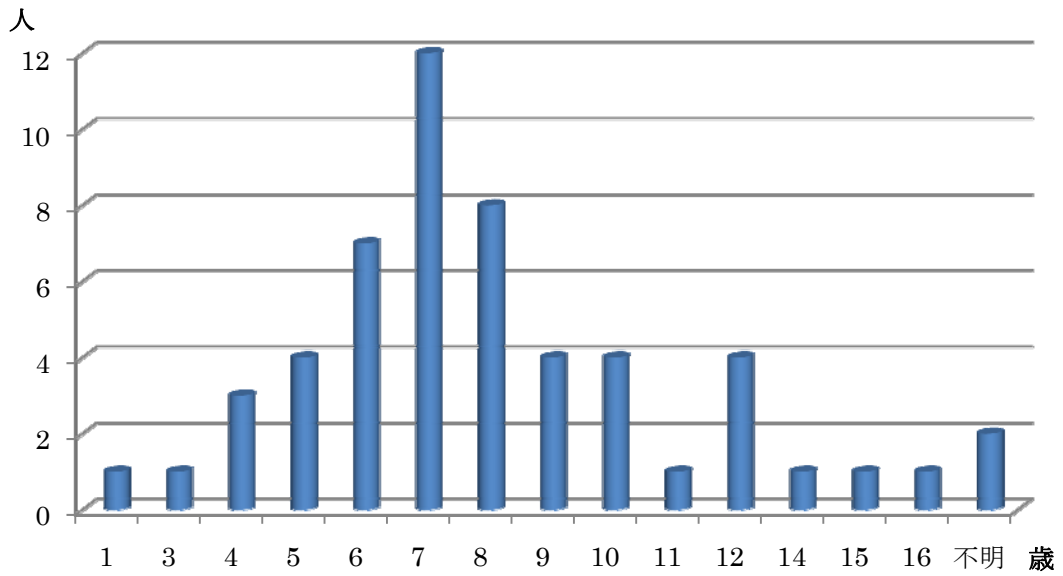
10月末厚生労働省の集計では計92例の脳症の届け出があり、22例/週発症と増加傾向にあります。また、3歳、4歳と低年齢での脳症発症も認められるようになりました。今後、さらに①年長児まで含む発症数の増加、②1～5歳の幼児における脳症の増加が危惧されます。推定500例の発症があった1997/98シーズンA香港型大流行の状況とよく似ています。異常言動から脳症に至る例や、意識障害から始まる例が多い点も特徴的です。新型インフルエンザ脳症について、現在、新しい治療法が必要かどうか現在検討を続けています。

### インフルエンザ脳症 (届出症例44例 10月26日現在)

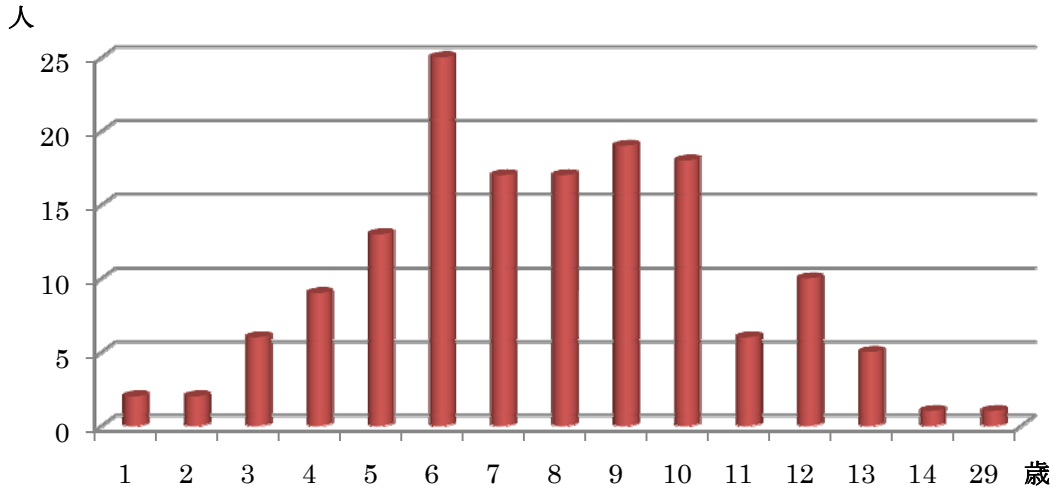


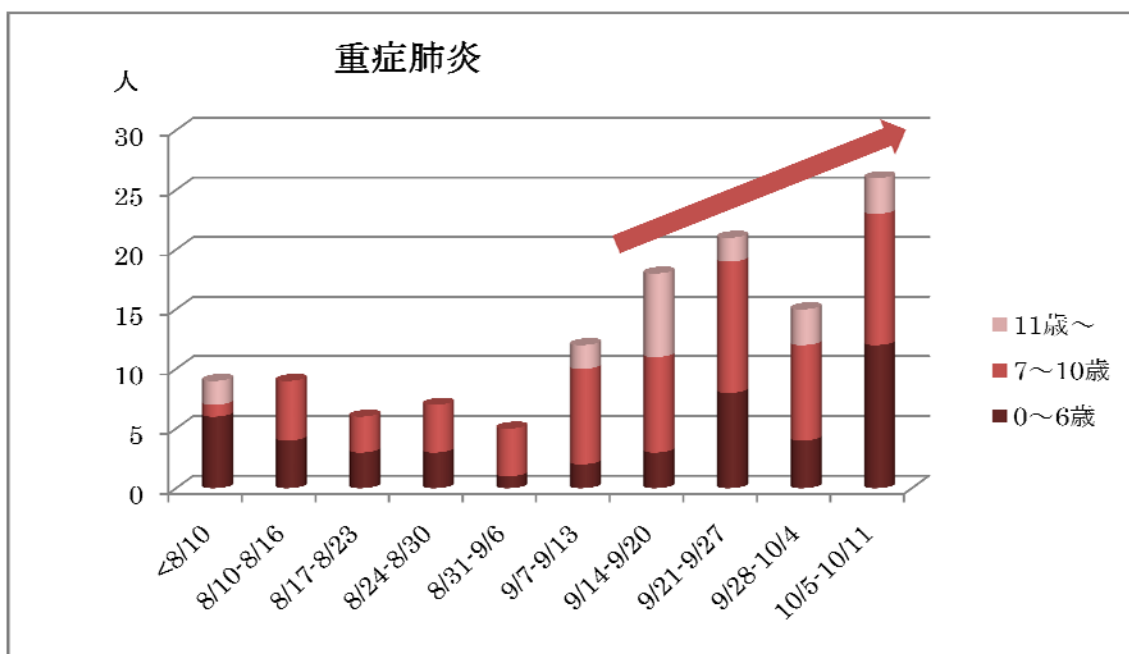
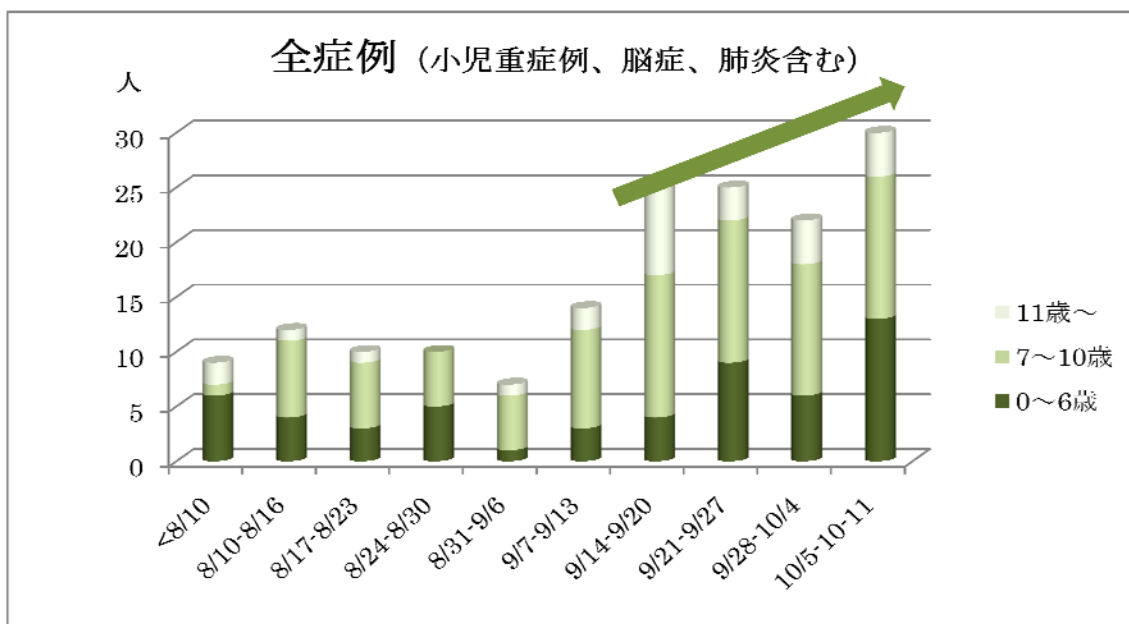
### インフルエンザ脳症累積症例 (54例)

(厚生労働省新型インフルエンザ対策推進本部9月2日報告例を含む)



# 重症肺炎 (届出症例151例 10月26日現在)





このグラフは厚生労働省へ提出しました緊急要望書（ホームページに掲載しました）に添付した資料です。

次回は世界における新型インフルエンザの動向と、日本における現状との比較を特に、小児についてご報告したいと思います。

今後も全国で感染が拡大しています。引き続き新型インフルエンザ重症例のご報告をいただけるようお願いいたします。

（日本小児科学会新型インフルエンザ対策室 文責 森島恒雄）